


タイトル	エドワード・ルトワックの戦略論
原題	STRATEGY The Logic of WAR and PEACE
著者	エドワード・ルトワック (Edward Luttwak)
訳者	武田康裕 (たけだ・やすひろ) 塚本勝也 (つかもと・かつや)
出版社	毎日新聞社
発売日	2014年4月30日
ページ数	417ページ

本書は、欧米の大学で広く用いられている権威ある文献だが、戦争のマニュアル本ではない。著者はアカデミックな戦略研究を^{なりわい}生業としているわけではない。本書でも触れているが、各国政府や民間企業のコンサルタントとして活躍しており、その幅広い実務経験が透徹した戦略の分析を裏打ちしている。さらに、独立したコンサルタントとして生計を立てているからこそ、しがらみにとらわれず発想できるのである。

ルトワックといえば、ネオコン派である。したがって、H・キッシンジャーやT・ガイトナー等とは相容れないところがある。

 昨年(2013.7)出版された著者の「自滅する中国」(奥山真司訳)も非常に参考になった。中国はなぜ対外政策面で行き詰まるのかを鋭く分析している。著者が驚くほど「嫌韓派」であることや、著者の天敵のキッシンジャーが極端に「親中派」であることはよく知られているが、その理由などがあからさまに記されている。

中国は、漢民族同士であれば通用する古典的な文化的背景に基づく戦略を、他の異民族に対しても適用できると考えているため、中国は計算違いをしているというのがルトワックの主張だ。中韓に関しての他の問題点も、箇条書きでまとめられており判り易い。

実は、安倍首相も野党時代からルトワックと勉強会を開いており、首相就任後もルトワックは首相官邸を訪問しており、非公式な軍事顧問だろうと言われている。

古い話では、ペルーのフジモリ大統領に対しても、センデロ・ルミノソ対策の助言をしていたとも言われている。

本書の初版が出版されたのは1987年であり、日本語に翻訳されたのはそれから四半世紀以上たった2014年であり、しかも完訳は2001年度版である。すでに中国、韓国、フラン

ス、ロシア、トルコ、イタリア、ドイツ、エストニアなどで翻訳されており、日本では待望の翻訳というわけである。

さて、本書のキーワードはなんといっても「逆説的論理」である。我々が日頃慣れ親しんだ合理的な思考の否定と、常識が見逃してきた真実の提示には、不思議な説得力がある。「逆説の論理」を単なる言葉の手品で終わらせない理由は、人類の戦争の歴史に対する著者の卓越した知識と深い洞察力にある。さらに、本書を比類のない名著に仕立て上げているのは、従来の古典とは異なる戦史の解釈と独自の分析枠組みにあると記者は指摘する。

例えば、太平洋戦争でも、そもそも米国との開戦を決意した時点で日本に勝ち目はなく、むしろ真珠湾攻撃で大敗していた方が米国の余計な怒りを招かず、戦後の寛大な条件を引き出せたかもしれないと指摘している。これは、戦争が大戦略のレベルで決することを強調し、戦術や作戦に偏った近視眼的な見方を戒めたものである。

また、国連を中心とする PKO（平和維持活動）についても、戦争をいたずらに長引かせるだけだと喝破し、当事者に力尽きるまで戦わせた方が永続的な平和をもたらすという主張は、我々が広く共有している常識に真っ向から挑戦するものである。つまり、戦略の世界ではむしろ常識を適用した方が望まない結果をもたらすという、戦略の逆説的な本質を示すことが本書を通底するテーマとなっている。

まず、目次を見ておこう。

第1部 戦略の論理

第1章 戦争における逆説の意識的活用

第2章 行動の論理

第3章 効率性と成功の極限点

第4章 反対の一致

第2部 戦略のレベル

第5章 技術レベル

第6章 戦術レベル

第7章 作戦レベル

第8章 戦域戦略 その1・軍事作戦と政治的選択

第9章 戦域戦略 その2・攻撃と防御

第10章 戦域戦略 その3・阻止攻撃と奇襲攻撃

第11章 非戦略 —— 海軍、空軍、核戦力

第12章 戦略的エア・パワーのルネサンス

第3部 最終結果 —— 大戦略

第13章 大戦略の射程

第14章 武力による誘導

第15章 戦争における調和と不調和

第16章 戦略は有用か

日本のように、「戦争は邪悪だから、軍隊はいらない」といった素直で直線的な論理に対して、著者は、「平和を欲するならば、戦争に備えよ」、「すべてを守ろうとする者は、何も守れない」といった逆説の論理で応じる。

さて、以下に示す幾つかの文章を「戦略の逆説的論理」を裏付ける文脈で読み解くとどうなるだろうか。文章を読んで、合理的な思考の否定と、常識が見逃してきた真実の提示をして欲しい。なお、以下の文章は、すべて「田母神戦争大学（心配しなくても中国とは戦争になりません）田母神俊雄・石井義哲：産経新聞出版」から借用したものである。

・尖閣諸島では、日本の多くの識者は「中国を刺激しない対応が正しい」という。しかし、歴史が証明するように、刺激しない対応をしていると、状況は中国にとってますます有利になるだけである。すなわち、中国に対しては、大人の対応では駄目で、子供の対応が必要となる。

・森本敏元防衛大臣が次のように言っている。「日本は、中国を挑発すべきではないし、中国に挑発を許してもいけない。また、日本側から挑発してきたという口実を、中国側に与えるような行動も取るべきでない。中国の方が、それを利用しようと待っているからである」。(産経 正論 2013.1.28) しかし、これは日本人に、「戦争になったら、尖閣はくれてやれば良いじゃないか」と言わせるための情報戦ではないのか？ 戦争になりそうだと受け取っていること自体が、もう情報戦に負けているということだ。

・朝日新聞（2013.12.18）の社説「安倍政権の安保戦略 平和主義を取り違えるな」で国家安全保障戦略について触れている。

曰く「そして今回の安保戦略、さらに、集団的自衛権の行使容認というパズルのピースが嵌れば、安倍首相の目指す「強靱化」はほぼ完成する。その時、戦後の平和主義は足元から崩れる」。まるで、「朝鮮日報」を読んでいるようだ。

・「自国の軍事力が強い方が、より安全」というのは子供にでも判る。核武装していない国よりは、核武装している国の方がより安全である。日本は、この反対がまかり通る特異な国である。「軍事力が強くなると、戦争になる」とすぐに騒ぎ出す。

・朝日新聞は、旧来の戦闘機、護衛艦、戦車、ミサイルというのが大嫌いだ。ところが、サイバーは必要だという。サイバーの世界では、攻撃を考えないと、どういう守りが良いかという発想は出てこないというのに！ 日本は「攻撃」については思考停止である。

・日本の防衛力を持ってアメリカの軍事力が完結するという。しかし、現在のアメリカ戦略は、基本的には日本を軍事的に自立させないで置いて、経済支配をし、軍事的に自立させないために、まず、攻撃力を持たせない。

そして、アメリカの戦闘機やミサイルシステムを使わせる。そうすれば、日本は絶対にアメリカから自立できない。アメリカがへそを曲げたら、戦闘機やミサイルはいくらでも動かないように出来る。

・朝日新聞は社説「防衛大綱「専守」の原則忘れるな」(2013. 7. 27) でこう言っている。「軍備増強が他国の警戒と軍拡競争を招けば、結果的に増強の意味が無くなる。それが“安全保障のジレンマ”と呼ばれる現象だ。配慮を欠けば、逆に安全環境を悪くしかねない」。

今でも覇権を求め、軍備増強をし続けている中国に「あんたたち、やらないでね。私もやらないから」と言って通じる相手だと朝日新聞は本気で思っているらしい。

・中国はロシアから Su-35 を輸入するという。戦闘機の性能を決めるのはソフトウェアだ。ソフトウェアで 2 ランクぐらい能力を下げたものを、中国には輸出するだろう。当たり前だがロシアと中国の Su-35 が空中戦をすると、ロシアが必ず勝つ。というのも、ロシアが必ず勝つという状態でしか輸出しないからである。輸出したものに負けたら馬鹿みたいだから、スペックダウンは兵器輸出の常識である。兵器の能力を決めるのはソフトウェアだ。ソフトウェアは外からは見えない。したがって、作った国の継続的な技術支援がなければ兵器の能力は維持できない。アメリカが日本に F-35 を輸出するのも、全く同じ理屈だ。

本書は、ナポレオンの時代からドイツのビスマルク、ベトナム戦争、第 2 次世界大戦から地域紛争、PKO 活動まで幅広い戦いの事例から「戦略」とその「論理」など独自の手法で紐解き、逆説的論理から導き出した戦略の一般理論を大戦略として示している。

日本のように「単純に平和を叫ぶだけ」でも、北朝鮮のように「好戦的に相手を煽るだけ」でも自分たちを守ることは出来ない。複雑な現象には、その複雑さをありのままに見た上で対峙する必要がある。本書は、多くの読者に冷静な視点を持って物事を考える助けになるだろう。文章が固く少し読みにくいだが、事例は豊富で面白い指摘も多く読み応えがある。

2014. 8. 6